

平成 26 年度（2014 年度）秋季特別展

一片の瓦から～東アジアにふれる～

平成 26 年 10 月 4 日（土）～11 月 30 日（日）



上／黄釉龍文軒丸瓦（中国・清代）
下／黄釉龍文軒平瓦（中国・清代）
（いずれも帝塚山大学附属博物館所蔵）

瓦は約 3000 年前に中国で誕生しました。そして朝鮮半島を経て日本列島に伝えられました。それは仏教の伝来と軌を一にし、寺院の屋根を飾り、のちに宮殿の^{いらか}礎となったのです。

写真の瓦には黄龍の模様がみられます。五本指の龍ですから、皇帝のシンボルです。しかも黄色です。黄色は陰陽五行説の五色では、中央の色です。東西南北には青龍、白虎、朱雀、玄武がそれぞれ配されますが、黄龍はその中心に位置します。中国の土質は、中央の黄土高原をかこみ、東西南北がそれぞれ青灰色、白色（浅灰色）、紅色、黒色となっています。つまり、写真の黄龍は中国中心部に位置する皇帝の象徴なのです。

吹田の紫金山とその周辺でつくられた瓦が難波宮や平安京の宮殿を飾りました。難波宮から発掘された瓦の文様と、七尾瓦窯の瓦片のそれとが一致し、吹田で製造されたことがわかったのです。瓦片をあなどってはなりません。一片の瓦にも歴史がひそんでいるからです。（中牧弘允）

瓦窯跡に行ってみよう！－七尾瓦窯跡と吉志部瓦窯跡－

博物館の近くには国史跡に指定された2つの瓦窯跡があります。七尾瓦窯跡と吉志部瓦窯跡です。七尾瓦窯跡は奈良時代の8世紀前半に後期難波宮の瓦を作り、吉志部瓦窯跡は8世紀末に平安宮の造営に関わった大規模な瓦工場でした。

両瓦窯跡は史跡公園として整備されています。博物館を見学された際には現地を訪れ、古代の瓦作りに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

博物館内には、七尾瓦窯跡3号窯跡、吉志部瓦窯跡H1号窯跡を実物大で復元し、展示しています。



蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦

七尾瓦窯跡

(吹田市岸部北5丁目)

聖武天皇は神亀3年(726)、藤原宇合を知造難波宮事に任命し、難波宮を瓦葺きに改修する工事に着手しました。その瓦の生産地に選ばれたのが、ここ七尾瓦窯跡でした。

昭和54年(1979)に行われた発掘調査では7基(登窯6基・平窯1基)の窯があることがわかり、そのうちの3号窯跡は窯に瓦を詰めて焼かずのままの状態が発掘され、古代の瓦窯操業の実際の様子を知ることができる大きな発見でした。その後、窯の北側では、瓦製作に関わる掘立柱建物跡、粘土精製のための大溝跡などが見つかっています。

作られた瓦は、蓮華文軒丸瓦(1種)と唐草文軒平瓦(2種)のほか、丸瓦・平瓦・面戸瓦・熨斗瓦などがあり、軒瓦は、主に難波宮の内裏や大極殿など宮の中核部で使用されました。



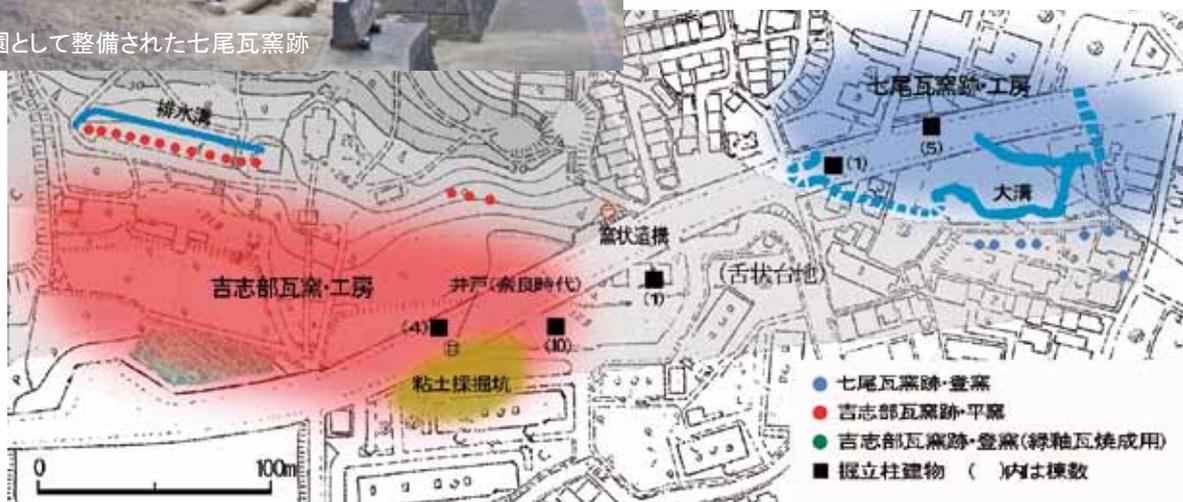
発掘された3号窯跡



史跡公園として整備された七尾瓦窯跡



窯跡の北側に掘られた大溝跡



七尾瓦窯跡・吉志部瓦窯位置図

吉志部瓦窯跡

(吹田市岸部北4丁目)

吉志部瓦窯跡は、延暦13年(794)に始まった平安京造営のため、その当初に操業した瓦工場です。これまでの発掘調査で15基以上の平窯、4基の登窯が確認され、掘立柱建物跡、粘土採掘の跡、瓦成形用のロクロ台跡など遺跡全体の様子が明らかになりつつあります。

およそ吉志部神社の鳥居前の道路より南側で、粘土採掘や瓦の成形が行われ、天日乾しの後、平窯で焼成しました。尾根直下の斜面に築かれた登窯では、緑釉瓦が焼かれました。

作られた軒丸瓦は6種、軒平瓦は6種で、丸瓦・平瓦・面戸瓦も生産されていました。



蓮華文軒丸瓦



唐草文軒平瓦



緑釉瓦となる蓮華文軒丸瓦



緑釉瓦片・窯道具



吉志部瓦窯跡 map

●印のところに解説板があります。



上／発掘された平窯跡 (H1号窯跡)

右／H1号窯跡焼成部



ロクロ台の跡

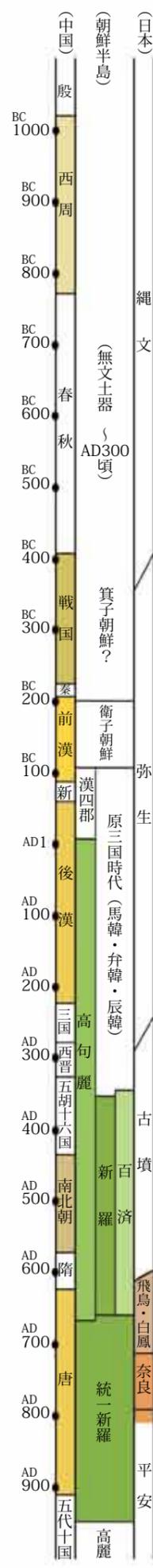


粘土を採掘した跡

古代東アジアの瓦の歴史

- 特別展展示資料でたどる -

今回の特別展では、七尾瓦窯跡や吉志部瓦窯跡で作られた瓦のルーツでもある中国や朝鮮半島の瓦の歴史も紹介します。



西周の瓦

西周は殷の滅亡後に現在の西安市を中心にして栄えた王朝です。瓦は周王朝の権威の象徴でもあり、支配下にある周辺地域に広まっていきました。初期の瓦は平瓦のみで、中期頃に丸瓦ができます。③には屋根に固定するための突起がついています。

西周 BC1100頃～BC771年。都は豊邑、後に鞏京(現・西安市)に遷る。



戦国の瓦

西周の終わり頃に、丸瓦の先に半円形の文様部をつけた瓦が作られるようになり(文様部分を半瓦当といいます)、戦国時代の各国でさまざまな文様が使われました。燕では饕餮文(④⑤)、齊では樹木双獣文(⑥)や樹木文(⑦)が見られます。

燕 BC1100頃～BC222年。都は薊(現・北京市)。



齊 BC1100頃～BC221年。都は營丘(現・臨淄市)。



秦・漢の瓦

秦・漢の時代には半瓦当から円瓦当へと変化が起こります。秦は戦国時代には雲文・葵文・動物文が使われていましたが、統一後には雲文が多くなります。漢も同様に雲文(⑧)が主流でしたが、後に吉祥句を配した瓦当(⑨)が用いられるようになります。



漢 BC206～AD8年(前漢)、AD25～220年(後漢)。都は、前漢が長安(現・西安市)、後漢が洛陽(現・洛陽市)。



唐 AD618～907年。都は長安(現・西安市)。



南朝

朝鮮半島の瓦

朝鮮半島に瓦が伝わったのは、前漢がいわゆる漢四郡を設置した紀元前2世紀頃で、その後の瓦作りは楽浪郡の技術を基本とし、発展していきます。高句麗、百濟では4世紀代、新羅では5世紀に瓦作りが始まり、それぞれ特徴のある文様が見られます。高句麗では蓮蕾文を施した赤褐色の瓦(⑬)が好まれ、百濟や新羅では中国南朝の影響のもとで蓮華文(⑭⑮)が発達しました。

高句麗



百濟

?～660年。都は慰礼城、後に熊津(現・公州市)、泗沘(現・扶餘郡)。

新羅

?～AD935年。AD676年に朝鮮半島を統一した後は統一新羅という。都は金城(現・慶州市)。



統一新羅



【初期寺院の瓦】

日本列島の瓦

『日本書紀』崇峻天皇元年(588)条には百濟から瓦博士4人が遣わされたことが記され、ここに日本の瓦作りが始まりました。最初の頃の瓦は百濟の瓦によく似ていて(⑰)、百濟の技術によって作られたことがわかります。7世紀前半には新羅の影響を受けた瓦も作られます(⑱)。飛鳥・白鳳期の瓦は寺院建築の象徴でしたが、694年の藤原京造営で初めて都の建物に瓦が採用され(⑳)、平城京(㉑)、難波宮、長岡京、平安京へと続きます。また地方の国衙などでも瓦葺き建築が普及していきます。



【都の瓦】

- ①平瓦(西周)
- ②丸瓦(西周)
- ③突起付平瓦(西周)
- ④饕餮文半瓦当(戦国・燕)
- ⑤饕餮文半瓦当(戦国・燕)
- ⑥樹木双獣文半瓦当(戦国・齊)
- ⑦樹木文半瓦当(戦国・齊)
- ⑧雲文軒丸瓦(漢)
- ⑨「與天無極」銘軒丸瓦(漢)
- ⑩獸面文軒丸瓦(南朝)
- ⑪蓮華文軒丸瓦(南朝)
- ⑫蓮華文軒丸瓦(唐)
- ⑬蓮蕾文軒丸瓦(高句麗)
- ⑭蓮華文軒丸瓦(百濟)
- ⑮蓮華文軒丸瓦(新羅)
- ⑯複合花文軒丸瓦(統一新羅)
- ⑰蓮華文軒丸瓦(横井廃寺・飛鳥)
- ⑱蓮華文軒丸瓦(豊浦寺・飛鳥)
- ⑲蓮華文軒丸瓦(山田寺・飛鳥)
- ⑳蓮華文軒丸瓦(川原寺・飛鳥)
- ㉑蓮華文軒丸瓦(藤原宮・飛鳥)
- ㉒蓮華文軒丸瓦(平城宮・奈良)
- ㉓蓮華文軒丸瓦(七尾瓦窯跡・奈良)
- ㉔蓮華文軒丸瓦(吉志部瓦窯跡・平安)

(①～⑫)所蔵・写真/帝塚山大学附属博物館 (⑬⑭)所蔵/当館

南朝の瓦

この時代になると、南朝で仏教と結びついた蓮華文が広まります。素弁の蓮弁には一筋の凸線が入っています。また、この時代には⑩のように獸面の文様の軒丸瓦も作られます。

AD439～589年。この間、中国南北で王朝が並立。華南では宋・齊・梁・陳、華北では北魏・東魏・西魏・北齊・北周の諸王朝が興亡した。南朝の都はいずれの王朝も建康(現・南京市)にあった。

* 図中の矢印は時代の流れを表しています。必ずしも伝搬ルートを示すものではありません。



当館が事務局をつとめる北大阪ミュージアム・ネットワークのメンバーとしてたいへんお世話になっている高槻市立今城塚古代歴史館の森田克行館長に、三嶋地域の古代史や今城塚古代歴史館のことなどについてお話をおうかがいしました。

森田克行（もりたかつゆき）

高槻市立埋蔵文化財調査センター所長、高槻市教育委員会地域教育監などを経て、現在、今城塚古代歴史館館長、専門は考古学。安満遺跡、今城塚古墳、阿武山古墳などの発掘調査、研究に携わる。



中牧館長：北大阪ミュージアムネットワークではお世話になっております。今年もミュージアムメッセやシンポジウムを計画しておりますのでご協力をお願いします。去年は貴館で阿武山古墳に関する大シンポジウムがあり、高槻市はすごい埋蔵文化財を抱えていますね。

森田館長：北大阪ミュージアムネットワークでは、是非とも淀川を取り上げていただきたいと思えます。淀川の水運は各地域、各時代で関わりがあり、特に古代の山陽道ができる前は和歌山から瀬戸内を経て西日本全体に通じる重要な交通路といえは淀川です。そこに大和王権も目をつけています。古代は飛鳥や奈良が中心ですが、そこは王権の本拠地であって政庁や王宮はありますが、全国に施策展開していくには表玄関がいります。歴代の天皇が淀川の治水や兩岸の開発などに取り組み、その流れの中で北摂地域がどう位置づけられ、どう働きをしていたのかを遺跡が物語ってくれています。

中牧館長：北摂の淀川流域を忘れるなということですね。木津川の流域には奈良の河川が注ぎ

こんでいます。

森田館長：これまで古代史では大和川水系が非常に重要とされていたのですが、実際、大和川の水運が本格的に活用されるのは江戸時代以降です。ところが淀川や木津川は瀬がなく、木津まで大きな舟が通れます。だから大和盆地を王権の本拠、その表玄関として淀川河口の港湾設備があって、その間に位置するのが北摂地域です。そういった地理的な要因が、この地域の歴史、文化の根底にあるんですね。

中牧館長：奈良から淀川べりに出てきて、それが広がっていく。

森田館長：最初に淀川河口に進出したのは大隅宮を造営した応神天皇とみられますが、きちんとした形で出てきたのは仁徳天皇です。仁徳は上町台地に高津宮を造営し、難波堀江を開削、さらに茨田堤と墨之江津を造ります。そのおよそ百年後に継体天皇が淀川の中流域の整備をします。枚方の樟葉に王宮をつくり、その次に筒城宮、さらに弟国に行き、最終的に大和の磐余玉穂宮に入ります。河内や山城など融通無碍に王宮を移動しているように見えますが、淀川、木津川の縁辺からまったく離れていません。継体はおそらく仁徳の後を受け継いで、淀川中流から木津川にかけての沿岸整備を仕上げたのでしょう。大和王権百年の計ですよ。それは結局、王権の本拠と表玄関をきちんと連携するという大きな政策意図があったことなのでしょう。継体はそれまでの王権とはいささか異なり、大きな国難に対応する場面で近江から颯爽と登場してきます。天皇家としては繋がるけれど、系譜としてはいささか傍系になります。仁賢天皇の皇女手白香を娶って、大和に入るわけですが、おそらくその前に大きな仕事として、淀川、木津川の沿岸部に、兵員輸送の大型船による大船団を仕立てられるように、港を整備するなど水運を充実させ、その後の百済の救援や磐井の乱に対応することになったのでしょう。高槻に津之江という地名がみられますが、津は港、江は川で、内陸部にある川の港という意味です。いまも津之江の一角に筑紫津神社があり、筑紫は九州、津は港ですから、まさに「九州港」神社です。

すなわち九州に船団を繰り出す川港なのでしょう。継体は最前線で陣頭指揮するため淀川縁に出てくる必要性があって、樟葉宮あるいは筒城宮などで準備をすすめたものと思われます。

中牧館長：なるほど。そういう意味では北摂地域はもっと脚光を浴びてもいい。

森田館長：茨木市に太田茶臼山古墳という五世紀中頃の古墳があります。全長 226 メートルの大形古墳ですから、大和王権との関わりが当然あるわけですが、何故、三嶋に造られたかについては、これまで明快な答えがありませんでした。今、私が取り組んでいることの一つに、古代以来の灌漑水路である五社水路（三島大溝）の研究があります。その開削時期については太田茶臼山古墳の築造前まで遡ることがわかってきました。三島の高燥地である広大な富田台地ですから、大規模な水路をひかないと開発できません。ところが三島の豪族である三島県主一族はそんな土木技術力や動員力を持っていません。そこで大和王権が富田台地の開発を梃子に、三嶋にくさびを打ち込むような形で太田茶臼山古墳を築造し、大和王権が淀川を押さえる大きな拠点を造ったのでしょう。安閑天皇の時には竹村（たかふ）屯倉を設営して、大王の直轄領としていくわけです。そこにのち、鎌足が「三島別業」を設け、さらには不比等とその後継である房前など藤原北家の荘園がこのあたりに成立します。

中牧館長：ずっと繋がるんですね。

森田館長：そうですね。高槻市と茨木市に跨ってある阿武山古墳という中臣（藤原）鎌足の墓も有機的に繋がっています。阿武山古墳が鎌足墓としたら、なぜ大王の棺である乾漆棺が納められているのか、です。それは漆工の職人集団を鎌足が抱きかかえて、大王の棺の製作集団に仕立てていることが背景にあります。やがて乾漆棺の製作が終わり、不比等の時代になると、王権や藤原氏に近侍する漆工集団は奈良の官寺の乾漆仏像の製作に関わるようになり、有名な興福寺の阿修羅像などが造られるのです。こうした大きな流れのひとつに三嶋の古墳が関わっていると睨んでいます。

中牧館長：大化改新をなした王権と中臣の勢力というのは北摂ですか。

森田館長：もともと中臣は東大阪の枚岡ですが、飛鳥に入って中大兄皇子と親しくなると、大化改新をやっていく。ところが『日本書紀』には

鎌足の活躍は不思議なことにほとんど触れていません。

中牧館長：藤原不比等あたりが『日本書紀』の編纂では影のプロデューサーというか……。

森田館長：非常に意識的に隠して記述していると感じますし、墳丘を造らず、墓室を地下に埋め込んだ阿武山古墳の在り方にも通じます。ところが鎌足や不比等の施策の実績としては非常に大きなものがあって、私としては乾漆棺、乾漆仏像などの製作経過をたどり、考古学的に追検証してみたわけです。阿武山古墳の乾漆棺からは遺骸が見つかったのですが、肋骨や背骨が相当傷んでいました。この状況が『日本書紀』の鎌足没年の記事にぴったり合ってくるのです。『書紀』には「遷殯山南」とありますが、どこの山とは書いていません。「遷して」とありますので、自宅から亡骸を移動してきて山の南で殯を実行したということです。私は、その山は阿威山で、阿威山の南側の三島別業に遺体を運んできて殯を営み、その北にある阿威山に埋葬したと考えると話がスムーズにつながっていくと思っています。

中牧館長：こういう話があると北大阪、北摂の歴史もおもしろいですね。

森田館長：やはり、キーワードは淀川です。「悠久の淀川」とはいいますが、その中味はたいへん深いものがありますね。

中牧館長：継体天皇陵については今城塚古墳と太田茶臼山古墳がありますが。

森田館長：私は二者択一の議論は終わったと思っています。これからは今城塚古墳を真実の継体陵だときちっと認識したうえで、発掘調査のとりまとめをしないと、成果を見誤ることになります。例えば今城塚古墳からは埴輪がたくさん出ていますが、これは大王陵の埴輪祭祀だと認識することだと思えます。私は今城塚古墳の埴輪配列は大王権継承儀礼としての殯宮の状況を表現したものと理解しています。動物の脚の埴輪に人の手をはりつけたものがあります。これは匍匐（ほふく）礼の埴輪と考えています。柿本人麻呂が高市皇子の殯宮で匍匐儀礼のことを挽歌で詠んでいて、鹿になぞらえて主人に二心ない忠誠を尽くす儀礼とされています。これが今城塚古墳の埴輪のなかに表現されているのです。『日本書紀』の殯宮の記事には、塀で囲むとか、門の前に衛士を立たせるなどの場景が描かれて

います。また殯の場での匍匐儀礼、あるいは誄(しのびごと)の奏上、さらには歌舞飲酒の状況がみてとれ、それらをもとに図面を作成すると、今城塚古墳の埴輪祭祀場の在り方にそっくりでした。これには内心、びっくりしました。

中牧館長：こうしたつながりをたぐり寄せていくとミュージアムネットワークでの活動も意味がでてきますね。

森田館長：近隣の博物館同士の交流事業としては、地域に根ざした文化財を活用するテーマが市民にとっても身近で親しみやすく、ふさわしいと思います。私は市町村の博物館は徹底的に社会教育施設であり、地域の人に開放し、気軽に来てもらいたいとおもっています。図書館や公民館と同じ目線で利用してもらうためにも、博物館の常設展示は基本的に無料がいい。これは博物館法でもうたっている。

中牧館長：本来はそうなんです。

森田館長：入館料を100円でもいただきますと、良い展示だと思った人でも、あの博物館は良いから行ってみたいと言ってくれますが、言われた人のほうに見学したいという高揚感がうまれなかったら、来てくれません。その点、無料だともみずから引き連れて来てくれますので、古代歴史館ではリピーターがたくさんおられます。無料の価値をひしひしと感じていますし、なによりも敷居をできるだけ低くして、地域のすばらしい歴史文化を一人でも多くの市民の方に伝え、ひいては郷土愛の醸成につなげていくのは、行政の責務だと思っています。

中牧館長：情けないことですが受付で帰る人がいる。

森田館長：特別展はほかの博物館の所蔵資料など、普段見られないものを一堂に展示するわけですから、一定程度、受益者負担の考え方を採り入れてもいいと思います。ただ、入館料で運営費をまかなうという発想ではなく、特別展自体の価値や重みに対する入館料です。

私はせっかく良い史跡公園や展示施設をつくったのだから、多くの人が親しみ、また利用してもらえるように、さまざまな工夫をしていかないとだめだと思っています。そこで今城塚古墳の公園化整備にあたっては、全国から愛称を募

集し、『いまして 大王の杜』と名付けました。また、文化財にかかわる人たちの全員が大賛成という話ではないでしょうが、莫大な経費を掛けて整備した歴史遺産を観光資源として活用し、ふだんからあまり歴史に興味がない人にも郷土の文化財の価値を共有してもらいたいと思っています。そのためにもさまざまなテーマの関連イベントを企画・開催し、来園される機会を増やすことです。そして一度行ってみたら過ごしやすい公園だと感じてもらえることも大事です。そのためには綺麗に保つことが肝心で、それがいたずらの助長を防ぐことにもなります。加えて市民の目です。『大王の杜』では年2回クリーンアップといって、周辺の自治会にお声をかけて住民参加による埴輪の清掃や草刈をしています。目的は地域の人たちに自分たちの公園だと思ってもらうことです。良好な形を維持していくには周りの人たちの協力が絶対必要です。

中牧館長：こういう施設は歴史遺産でもあるし、自然の環境も守らないといけない、特殊な場所ですね。

森田館長：ボランティア活動としては、文化財スタッフの会を立ち上げて、市民協働を推し進めています。まず希望者に講義やレクチャーをおこない、卒業試験もします。そして合格者には教育委員会から認定書を交付し、スタッフの会に入らせていただいています。会には事業委託し、体験教室の指導などをお願いしています。博物館では体験教室をイベントとしてやる場所が多いですが、歴史館ではいくつかのメニューを揃え、いつ来館されても歴史の体験学習ができるようにしています。これは社会教育施設としては大事なことです。そのためには不断のマンパワーが欠かせません。

中牧館長：当初のボランティアの人に加えて新たに募集されているんですか。

森田館長：基本的に、毎年広報に載せて募集しています。ボランティアさんたちも生き生きとして活動されていますし、そうしたことのお手伝いは文化財の普及啓発にとっても非常に大事なことだと思います。

中牧館長：いいですね。いろいろ新規のアイデアなどおうかがいでき、ありがとうございました。